

## ムルソーの《不幸》の瞬間

柳 沢 文 昭

ムルソーの犯した犯罪は、友人のセレストに言わせると、《一つの不幸<sup>1)</sup>》ということになるのだが、その《不幸》がムルソーを虜にしようと機会を窺っていたあの日曜の正午から昼下がりにかけて、彼は、被害者となる定めのアラブ人に都合三度、遭遇している。そのうちの最初の二回は、《不幸》も彼を見逃したようである——一度目にはなぐり合いが演じられレイモンが負傷するが、ムルソーはその圏外にとどまり、二度目には泉の湧き出る岩陰で双方にらみ合うが、直接的な衝突には至らない。その二度目の遭遇から引き上げて来た時、彼はレイモンから取り上げた拳銃を上着のポケットに入れたまま、マリー達の待つ浜辺の別荘の入口の階段の前に立ち止まる：

ぼくは別荘のところまで(レイモン)について来て、彼が木の階段を登って行く間、いちばん下の段の前でじっとしたままでいた。頭は太陽でがらがん鳴り、木の階段を登って行って再び女達と話をするのに要る労力を思うと気力も萎えた<sup>2)</sup>。

気を取り直し別荘の中へ入ったならば、ムルソーは、もうアラブ人と出くわすこともなく、その結果、それを射殺せずにすんだはずだ。ところが彼は意思力の衰退に身をまかせたまま、そこに佇み続け、やがて折からの暑熱に耐えきれなくなり、砂浜の方へ、取り返しのつかない結果に終わる三度目の遭遇に向けて歩き出すのである：

だが非常な暑さであって、空から降って来る目の眩む雨の下にこれ以上じっとしているのが苦痛なほどだった。ここにとどまろうが行こうが同じことだ。一瞬の後、ぼくは砂浜の方を向いて歩き出した<sup>3)</sup>。

だから、彼の《不幸》の起源には彼自身の怠惰

があると言わなければならない。彼がこの時、打ち克つことができなかった内部的なある種の弛緩、ここから《不幸》への歩みが始まる<sup>4)</sup>。

だが、砂浜を三たび歩み始めてからは、また別の傾向が見られるようになる。それは、過去への遡行、あるいは記憶の現在への浸透とも呼ぶべきものである。そして、それは下に示すとうり段階的に進行して行く。

別荘の戸口の前でためらったあげく踵を返し砂浜に戻って来たムルソーはまず次のように感じる：

同じ真赤な輝きだ<sup>5)</sup>。

ここで彼は、つい先ほどのためらいの際に抱いた予感——《ここにとどまろうが行こうが同じことだ》——が、歩き出すやすぐに実現したことを確認しているのだ。つまりムルソーはこの言葉において、ほんの数瞬前の海と浜辺の《輝き》を指向している。

次に、しばらく歩き続け、岩陰に湧く泉のそばでアラブ人と顔を突き合わせた時には、彼は上着の中の拳銃を握りながら、こう思う：

ここにまで伸びて来ている同じ砂浜の上の同じ太陽、同じ光だ<sup>6)</sup>。

《ここにまで伸びて来ている同じ砂浜》とは、アラブ人達と最初に出会い乱闘となった地点と同一平面をなすこの浜、という意味である。なぜならば、この前後でムルソーは、《波の音は正午にくらべ、ずっと物憂げに、ずっと穏やかになっていた》、《既に二時間、昼は歩みをとめて煮えたぎる金属の海に錨を投げたままでいた》と述べ<sup>7)</sup>、乱闘の行なわれた時刻を指示しているからだ<sup>8)</sup>。だから、この時ムルソーが思い浮かべて

いるのは二時間前のその光景である。

彼はさらに数歩、前方へ足を運ぶ。太陽の熱に頬が焼け、汗の滴が眉にたまる。と同時に彼は、一層深い過去へ投げやられる：

ぼくが母を埋葬したあの日と同じ太陽だ<sup>9)</sup>。

説明は不要であろう。この時、彼は数週間前の母の葬儀の日に在る。そして、この想念が意識をよぎった数瞬後に、彼はアラブ人に向け発砲してしまう、つまり不幸の手の中に落ちるのである。

以上のように、アラブ人との最後の、そして不運な出会いが進行する間、ムルソーに対し過去が三度フラッシュバックされた。そしてそれは、テキスト中の三ヶ所に配置された次のようなルフランによって示されていた——《同じ輝き》、《同じ太陽、同じ光》、《…と同じ太陽》。真夏の真昼時の仮借ない光と熱がもたらす幻覚的な感覚印象が、それらが体験されるその時その時のままに、相互のつながりへの配慮のないまま積み重ねられていくテキスト中において、この規則的なくり返しは際立って読む者の注意を惹く。その時その所で、つまり現時点と現地点とで自分をとり囲むもののみに向けられていたムルソーの意識が、そのルフランのたびごとに何か異質なものの干渉にさらされるのを我々は感ずる。即ち、《同じ》という判断を彼が下すたびに、それが仲介をして、現にあるものと既に見てしまったものが触れ合わされ、その結果あたかも時間のシステムの内部に短絡が起ったかのように、現在の回路に過去の所与が充満するのである。

ムルソーの意識が継起的に過去によって浸透されていたというこのことは、彼の犯す犯罪と関連があるのだろうか。それについて即座に断定を下すことはできないが、少なくともそのことはムルソーにあっては常ならぬことであるらしい。例えば、P.-G. カステックスは、「異邦人」の主人公が現在時に対する感受性しか持たぬこと<sup>10)</sup>、彼に過去の記憶が甦るのは、隠された情緒的な大きな変動が内部に予想される時であるこ

と<sup>11)</sup>、またそのようなケースはいたって稀であること<sup>12)</sup>、などを指摘している。R. キーヨもムルソーは《全的に現在時に在る》と書いているし<sup>13)</sup>、実際、小説中の何ヶ所かには、それを裏づける記述が見出される<sup>14)</sup>。だから、本来現在時の人間である彼が、あのようにくり返し、そして漸次深く過去と交わったということは、その人格の安定性に関してある種の危惧を抱かせる事態なのである。

殺人に先行するいくつかの重要なムルソーの動作を点検してみると、やはりそれらが過去に支配されていることが分る。まず、砂浜を歩き始めてすぐの過去との交わりにおいて彼は、ほんの数秒前の逡巡の時へ投げ戻されていたのだが、その時の彼のためらいはアラブ人との二度目の遭遇を含む彼とレイモンとの浜辺の散策の最後の段階にあたっていた。その散策の行程はそのためらいの瞬間において完結した。つまり、それはその瞬間の内に、あるいは背後に、その瞬間を規定し同時にそれから規定されるものとして置かれている。それゆえ、甦ったその瞬間は、それ自身が締めくくるその行程をともにムルソーの前に引き出す。ところでその行程中、最も印象深い事柄、その行程のレジュメともライトモチーフとも言えるもの、それはアラブ人達が憩っていた岩陰とそのかたわらの泉である。そして、そんな具合に彼に与えられたその泉が、今、彼が開始しつつある新たな彷徨の目標とも、動機ともなる：

ぼくはゆっくりと岩場の方へ歩いて行った。ぼくは岩のむこうのつめたい泉のことを考えた。ぼくはその水のささやきをもう一度、聴きたかった。……日陰とその憩いをもう一度、見出したかった<sup>15)</sup>。

だが、その場所にはアラブ人が独りきりで戻って来ていたのだった。結局、ムルソーがまもなく自分の犯罪現場となる場所に来て、被害者となる人間に出会うのは、過去に導かれてのことなのだ。

そのアラブ人は、ムルソーを目にするや手をナイフの隠されているポケットに運ぶ。ムル

ソーはそれに応じて、上着の中の拳銃を握る。なぜか？ 理由は、やはり先ほどの泉のかたわらでの一件に求められる。あの時ムルソーはレイモンから拳銃を取り上げようとして、《君の拳銃はぼくによこせ。もしもう一人が加勢したり、やつがナイフを抜いたりしたら、ぼくがやつをやる<sup>16)</sup>》と言った。そして今、目の前で《やつ》はナイフを抜こうとしている。そこでムルソーは誓いに忠実に、あるいは暗示効果に引きずられ、ともかくも過去の言明どうりの行為に取りかかるのだ。

次にムルソーは、さらに過去へ、二時間ほど前のムルソー達、白人のグループとアラブ人のグループとの間の乱闘にまで遡った。

この場合の過去の影響は、しかしながら、それほど明確なものではない。現在、彼は泉の近くで、個人的ないかなる感情的執着もそのアラブ人に対し持っていないにもかかわらず、魅入られたかのように対峙を継続している。束の間、自省心がぎざし、《回れ右をするだけでよい、それで万事が片づく<sup>17)</sup>》と思いながらも、《太陽に震える砂浜全体が背後にひしめいている<sup>18)</sup>》ような気がして、彼は退くに退けない。それどころか、さらに数歩前進してしまう。これらのことはみな、集団の戦闘が鼓吹する、個人的利害、感情を顧みない盲目的な闘争心、個別的判断を超越する攻撃的衝動の発露の例と考えることができるだろう。それならば、やはりムルソーはこの時点で、数時間前の集団的な暴力的衝突の記憶の支配下にあると言える。

最後にムルソーは、母親を葬ったあの日に到り着いた。あの葬儀の日は、この物語の過去の奥行き最深部である。だからこそ彼は、母親の死から始めてこの物語を語り出したのだ。もちろん小説中には、それ以前の過去も喚起されてはいる<sup>19)</sup>。だが、彼の現在に割り込む過去、いわば活生化している過去は、それ以前には確実なものとしては見出されない。

ここで我々が目にしているムルソー、拳銃の入った上着のポケットに手をやりアラブ人と向き合っているムルソーは、実は同時に、同じ太陽の下、母の柩を守って墓地へ向って歩いてい

たムルソーなのだ。彼は語っている——《ぼくが母を埋葬したあの日と同じ太陽だ。そして、あの時のように頭が特に痛み、その血管は残らず皮膚の下で脈打っていた<sup>20)</sup>。》このように、彼の生理的条件もあの日のものだ。そして次の瞬間である、彼が決定的な一步を進めてしまうのは：

もはや耐え難いその焼けつく暑さのせいで、ぼくは前へと動きを起した。それが愚かなことだとは、一步動いたからといって太陽を振り切れるわけではないことは、よく分っていた。けれど一步、たった一步、ぼくは前へ出てしまった<sup>21)</sup>。

相手は、この一步に挑発されて、ナイフを抜くのである。(そして、《やつがナイフを抜いたりしたら》、ムルソーは射たねばなくなるのだ。)意志による統御をすり抜けて生まれたかのような、無意味で愚かしく危険なこの一步を、しかしながらムルソーは、眼前のアラブ人に向けて踏み出したのではない。それは、あの日、葬列に付き従いながら彼が進めた数えきれない歩数のうちの一步である。炎天下の葬列に加わって行った行進が、この時ムルソーにおいて感覚、知覚としてだけでなく、所作としても再現されたのである。彼がこの時この場に全的に存在しているわけではないことは確かだ。なぜならば、彼が《上着の中でレイモンの拳銃を握って<sup>22)</sup>》以来、やがてそれが銃声とともに発射されるまでの間、手の中にあるはずの拳銃は彼の意識を掠めもしない。特に、いつ彼がそれを抜いたかは——おそらく彼の踏み出した一步に応じてアラブ人がナイフを抜いた前後であろうが——全然、言及されていないからだ。彼は、自分の手の中のピストル、それに要約されるアラブ人達との間のそれまでの様々な経緯の自覚からは遠くに、あの葬儀の日に在る<sup>23)</sup>。記憶に繰られ、あるいは過去を模倣しながらムルソーは不幸の瞬間へ近づいて行く。それにつれて、彼をとり囲む自然は、その諸力を異常な激しさで発現し始める——《すべてが揺らいだのはその時であった。海からは濃厚な燃える息吹きが吹き寄

せた。空は全域に渡って裂け、火の雨を降らせるかのように、ぼくには思えた<sup>24)</sup>。》そして、激烈さの限界に達したこの熱と光の中で、ムルソーの《全存在は緊張し、(彼は)拳銃にかけた手を引きつらせ<sup>25)</sup>、》引き金を絞ってしまう。この動作、つまり、種類のいかんを問わず過度の感覚的刺激にさらされる場合に全身をこわばらせ、こぶしを——それが何かをつかんでいようがいまいが——握りしめるという動作は、日常的に観察される条件反射的な、自覚性の乏しい反応である。事実、ムルソーが同様の反応を示すのは、これが初めてではない。岩陰に向って歩き始めてすぐ、まだ拳銃がその手に握られていない時に、彼は同じ動作を既に演じている：

熱気の全体がぼくにのしかかり、ぼくの行く手を阻んでいた。そしてその熱い大きな息吹きを額に感じるたびに、ぼくは歯を食いしばり、ズボンのポケットの中でこぶしを握りしめ、全身を緊張させて、太陽とそれが吐き出す不透明な陶酔に打ち克とうとした<sup>26)</sup>。

この条件づけられた反応が手の中の拳銃と出合う時、ムルソーは殺人者となる。この条件づけがムルソーにおいて確立されているという事実は今の引用が明らかにしているが、それがいつ、どのように成立したかについては本文は何一つ語っていない。多分それは小説以前の彼の生活史の内に求めねばならないのだろう。ということになれば、彼の殺人の起源もまた、小説のテクストにのみ依拠する限り、完全に解明されることはない。が、いずれにせよ、この不幸の瞬間、彼は小説の外からではあるが、やはり過去に繰られている。

以上のように、過去がムルソーをアラブ人の面前に導き、拳銃を握らせ、引き金を引かせたのであるが、それでは、過去に身を委ねた人間の意識とは何であろうか。サルトルによれば、本来、意識の存在はその定義からして現在の(présent)である。と言うのは、《意識者の存在類型であるところの)対自存在は「(即自)存在への現前(présence)」として定義される<sup>27)</sup>》から、つまり、《対自のうちに……「世界への現前(présence)」が存する<sup>28)</sup>》からである。そして、

過去の意識、過去存在とは、現在であること(être présent)の欠如であるのだから、それは結局、対自の喪失である。その意味で、《われわれの過去は……即自によって取り戻された対自、即自によって凝固させられた対自、即自の充實的な密度によって浸透され盲目にさせられた対自、即自によって厚ぼったくさせられた対自である<sup>29)</sup>》。別の哲学者、例えばカミュが大学時代に親しんだプロティノスなども似たようなことを説いている——《記憶というものは魂の内にあることはあるが、肉体との接触から浄化された魂の内にあるのではない<sup>30)</sup>》。プロティノスによれば、記憶が機能するのは、《形而上学的実体内での魂のレベルの低下によって<sup>31)</sup>》、即ち《精神的生命の墮落に発して<sup>32)</sup>》である。過去がもたらすこの変動を《墮落》と見るか、単なる《取り戻し》と見るかは、存在の諸カテゴリー間に一定のヒエラルキーを設定するか否かによるだろう。が、いずれにせよ、過去、即ち(世界への)現前の挫折は、対自を構成する次元のうちの枢要なものの喪失を意味し、その結果そこで対自は停滞する。対自を全うせぬというのは、対象物に己れを明け渡すことである。つまり過去とは、人間に対する物対性の反攻に他ならない。

ムルソーの場合も、まさにそれが起ったのだ。最後の海辺の彷徨に発つ間際の彼の逡巡、自発的意思力の衰頹は、即自的惰性による対自の侵蝕を予想させる。そして事実、彼が過去へ滑落し始めるのはその直後のことだ。それ以後の彼の主要な動作は暗示あるいは条件づけ——両者は同じものと見なされることもある——に支配されていたが、これは有機体反応の機械性の、意識の自在性、自発性に対する優位を意味している。また、彼が《拳銃にかけた手を引きつらせる》直前、彼に対し四大の力が突然、堰を切ったように荒れ狂ったが、それは、彼の《世界への現前》の減退の結果、その相関者であることから解放され、それ自身であることを得た世界の相対的、錯視的な活性化である。ピストルを発射した後、彼は《自分が昼の均衡を破壊してしまった<sup>33)</sup>》ことに思い至るが、その均衡と

は、彼と、彼が現在の対自として現前していた世界との間に、彼が過去や物体性に蝕まれる以前に保たれていた均衡のことである。

結局、殺人の瞬間、不幸の瞬間は、ムルソーから掠め取られた現在時である。引き金を引いたのは過去によって凝固せしめられた現在である。彼はその時、物体性に包囲されていた。そのような条件下で形作られる動作は、《行為》ではない。それは《反射》である。つまり、《彼の意識が陥った混乱の状態にあって、ただ神経のインパルスのみが残存している<sup>34)</sup>》というわけだ。

そしてその場合、ムルソーはいかなる罪を犯したのだろうか。彼の行為が反射にすぎないという所見から即座に導き出せる結論は、彼に有利なものとなろう。なぜならば、そこには、彼個人の利害、動機、道徳的判断の介在する余地はなく、そのため、行為を主体の内的現実へ還元するいかなる努力も、責任関係設定のいかなる試みも、つまり、いかなる裁きも、不可能となるからだ。つまり、殺人の瞬間に世界の現在に現前することなく、そのため対自を失った、つまり自己に現前することもなかったムルソーには、殺人者誕生の現場への不在が保証されている。これが、《事情を十分に把握した弁護士だったら、偽りなく言うことができたであろうこと<sup>35)</sup>》である。

だが一方、《事情を十分に把握した》検事にも言い分はある。そのように、これ見よがしに無罪性をむさぼるのは罪ではないのか<sup>36)</sup>。具体的に言うならば、彼が現在を失い、物体性に自分を包囲することを許したこと、生理組織の機械的反応に己れを明け渡し、創造的自由を失ったことは、人間の在り方——《人間の存在と、人間が自由であることとのあいだには、差異がない<sup>37)</sup>》——からの逸脱、つまり罪であろう。要するに、過去と物体性とで己れを充たした結果、自発的、現在の存在としての自己を逸する、つまり、自分であることに失敗するという存在論的過誤を、彼は犯したのだ<sup>38)</sup>。

ムルソー自身、そのことをある程度まで洞察している。まず、小説の第2部が次のように書

き出されていることが注目に値する：

逮捕されるとすぐにぼくは何度か尋問を受けた。が、それは人定質問 (interrogatoires d'identité) で、長くは続かなかった<sup>39)</sup>。

ムルソーの殺人に終る第1部が、その殺人への歩みを支配する過去の考えられ得る限りでの最深部から語り出されたように、彼の裁きを扱う第2部は、その罪の想定され得る最も基礎的な層に触れることから始まる。つまり、彼の罪は《自分であること (identité)》に関わるものであることが、冒頭から彼自身の言葉で暗示されたのだ<sup>40)</sup>。さらにいま一度、公判の開始直後にも人定質問は彼の興味を捉える——《再びぼくは氏名を名のらされた。そして、苛立ちはしたもの、ぼくは、結局これも当然だ、間違っただけの人間を裁いてしまったら大変だから、と思った<sup>41)</sup>》。彼はここでは自己性の混乱に思いをいたしている。

続いて公判が彼の罪障を声高に叫び始める。ムルソー裁判は、有罪か無罪かを判定する通常の、《現実的な》裁判ではない。そもそも、被害者に全く言及がなされない裁判などあるだろうか<sup>42)</sup>。この法廷の目的としているところは、罪障の公認と定着であり、これはもはや裁判ではなく、一種の聖別式 (consécration) である。

そして、その法廷全体が審理を通じて努力を結集すること、それは被告ムルソーをまがいものの存在の内に決定的に閉じ込めることである。養老院での彼の振舞いの評価が最も良い例だろう。証人に立った養老院の院長は、ムルソーの母親は養老院に入れられたことで息子をなじっていたと証言するが、実はそのように身内を責めるのは、《収容されている老人達の癖という面もある》ということ、なぜか、そこに付け加えるのを忘れる<sup>43)</sup>。また、彼が母親の遺骸に直面しなかったという証言についても事情は同じだ<sup>44)</sup>。院長は、通夜のため養老院に到着したムルソーがまず母親を見たいと思っていたのに、院長との会見を優先させられたため、それを果たせなかったことを知らない<sup>45)</sup>。さらに、ムル

ソーが柩の安置所に行った時には、既に上蓋にビスが半ば打ち込まれていて<sup>46)</sup>、デリケートな心の持主ならば、そのような状態にある柩から蓋を剥がさせることはできないこと、葬列の出発直前に院長自身ムルソーに母親との最後の対面を勧めたが、その際、彼は同時に、葬儀屋の作業開始が切迫していることをも、ほのめかしたこと<sup>47)</sup>、なども、この証人は知らないか、あるいは忘れている。養老院の日常や、そこで営まれる官製の葬式の実情にうとい陪審員や傍聴人らは、これらの一面的な情報から、たやすく、忘恩の冷血漢のポルトレを引き出すことだろう。これに加えて、ムルソーのマリーとの関係、レイモンとの交友も不運な解釈を受ける。それが母の葬儀の翌日に結ばれたものであったり、あるいは、その結果グロテスクな痴話喧嘩に巻き込まれたりするものの、彼らとの交わりは、ムルソーの直接的な日々の経験の内にあることは、それなりの自然味と真率さを持っていた。だが、やはりそれらの束の間の真実は、法廷での尋問と証言との網によっては捕えられない。そのあげく、忘恩の冷血漢の両脇に、母の葬式の翌日拾った《情婦》と、やくざな友人が配されて、ムルソーの公式の肖像が完成する。

即ち、この法廷では、偽の通貨が本物を駆逐して通用しているのである。まがいものには、ムルソーによって現実生きられたムルソーではなく、公判関係者が見る、あるいは見ることを欲するムルソー、即ち、他人の視線の下でのムルソーの像が刻印されている。それは、自分が犯罪者であるというのは《なじめない考えだ<sup>48)</sup>》と言っていたムルソーが、傍聴席で自分を観察する人々の反応の中には、罪あるムルソーの姿を認めることができたことから分る：

ぼくはその時、法廷中を高揚させる何かを感じ、初めて自分は有罪であることを理解した<sup>49)</sup>。

つまり、彼はここで対他存在——これも即自の一つの型で、過去、物体と同様、対象性によって特徴づけられる——に局限されている、と言える<sup>50)</sup>。他人達の視線が、彼の直接の自己、彼が

生きている自己の、裁きの場への接近を拒む。かつて、過去意識が、あるいは物体性が犯罪の現場への彼の接近を阻止したように。彼はまたもやゲームに参加できないままにいる——《どちらかと言うと、みんなはこの事件をぼくを抜きにして扱っているという感じだった<sup>51)</sup>。》

こんなふうにして、彼は、自己を逸するという過誤の中に改めて据えられる。彼の罪は、これによっていわば公に批准され、動かし難いものとなる。弁護士の弁論のやり方すら、あからさまにこの傾向に肩入れする。それは、ムルソー自身の言葉で次のように報告されている：

ある瞬間、ぼくは……彼（弁護士）の言うことに注意を向けた。なぜなら彼は、《私が殺人を犯したのは真実であります》と言っていたからだ。そしてそのまま同じ調子で、ぼくのことを話すのに《私は》と断言しながら、あとを続けた<sup>52)</sup>。

彼は文字通り、殺人を犯した自分を奪われてしまった——《ぼくは思った、これではぼくをさらに事件から遠ざけることになる、ぼくをないがしろにして、ある意味ではぼくに取って代ることになる<sup>53)</sup>。》ここに至って、彼の彼自身からの疎外は完成された、と言わねばならない。

殺人の瞬間、あるいは不幸の瞬間、ムルソーは過去として、物的存在に自分を明け渡し、自発的、現在的自己たることを逸するという存在論的失策を犯した。すると時を移さず、罪の定着、批准を任務とする法廷——検察側のみならず、弁護人も含めて——は、対他存在という優れて社会的な存在様式を彼に課することによって、社会のただ中で、一度開いたその自己との懸隔がたやすく解消しないよう、二度と彼が自己を得ることのないよう、配慮をこらした。「異邦人（*L'Etranger*）」とは、過去、物質的惰性、他者などに次々と委ねられ識別困難となる自分の姿のことである。

## 注

1. *Albert Camus, Théâtre, Récits, Nouvelles : La Pléiade I* (以下、Iと略記), Gallimard, p.

- 1191.
2. I, p. 1166.
3. I, p. 1166.
4. ムルソーのこの気力の萎えた状態は、その直前のレイモンから拳銃を取り上げた際の断固とした、だが抑制の利いた説得のし方との対照において、特に際立っている。
5. I, p. 1167.
6. I, p. 1167.
7. I, p. 1167.
8. 別荘で昼食を終えた時、マリーは、《11 時 30 分よ》と指摘した (I, p. 1163)。そして、それからしばらくしてムルソー達は散歩に出かけ、アラブ人達とはち合わせする。
9. I, p. 1168.
10. CASTEX, P.-G.: *Albert Camus et L'Etranger*, José Corti, p. 14.
11. *ibid.*, p. 36.
12. *ibid.*, p. 75.
13. QUILLIOT, Roger: *La mer et les prisons*, Gallimard, p. 96.
14. よく引き合いに出されるのは、《ぼくはちょうど起ころうとしていること、今日あるいは明日にいつも捉えられている (I, p. 1197)》という箇所である。
15. I, p. 1167.
16. I, p. 1166.
17. I, p. 1167.
18. I, p. 1168.
19. 例えば、マリーとの過去のいきさつ (I, p. 1138)、学生時代のこと (I, p. 1156)、母親の言葉 (I, p. 1180)、父親のこと (I, p. 1203)、等々。
20. I, p. 1168.
21. I, p. 1168.
22. I, p. 1167.
23. その日の朝、起き掛けのムルソーへのマリーの言葉: 《まるでお葬式の顔ね (I, p. 1160)》。これは、葬儀の日に支配されるムルソーを予告している。
24. I, p. 1168.
25. I, p. 1168.
26. I, p. 1167.
27. サルトル, J.-P.: 「存在と無」第一分冊, 松浪信三郎訳, 人文書院, p. 309.
28. 同書, p. 220.
29. 同書, p. 305.
30. BREHIER, Emile: *La philosophie de Plotin*, Vrin, p. 73.
31. *ibid.*, p. 71.
32. *ibid.*, p. 71.
33. I, p. 1168.
34. CASTEX, P.-G.: *op. cit.*, p. 88.
35. *ibid.*, p. 88. そしてこれは大方の読者、批評家の見方でもある。例えば, FITCH, B.T.: *Le Sentiment d'étrangeté chez Malraux, Sartre, Camus, S. de Beauvoir*, Minard, p. 187.
36. ロジェ・キーヨは、ムルソーは尊大な無垢の過剰のゆえに罪があると考えている (QUILLIOT, Roger: *op. cit.*, p. 265)。
37. サルトル: 前掲書, p. 110.
38. たびたび問題となる、死体となったアラブ人に撃ち込まれた第二弾以後は、主体の不在のままになされたその行為に、遅ればせながら追いつき、参与しようとのムルソーの——彼は、最初の銃声によって現在に、対自に覚醒した——努力のあらわれである。《それは不幸の扉をたたく四つの短いノックのようだった (I, p. 1168)》——遅れてやって来たムルソーの鼻先で閉じられた瞬間の扉を再度、開かせ、その内部で己れに合体しようと、彼はむなしくそれをたたく。
39. I, p. 1171.
40. 論告及び弁論を聴きながらムルソーは、《ずいぶんとぼくのことを話された、たぶんぼくの犯罪のこと以上にぼくのことを話された (I, p. 1195)》という感想を持つ。つまり、彼が何をしたかではなく、彼が何であったかが、この裁判の興味の的なのだ。
41. I, p. 1187.
42. 《撃たれた男には名前がない (O' BRIEN, Conor Cruise: *Camus*, Fontana/Collins, p. 25)》。
43. I, pp. 1188, 1189.
44. I, p. 1189.
45. I, p. 1128.
46. I, p. 1129.
47. I, p. 1133.
48. I, p. 1176.
49. I, p. 1189.
50. 《ムルソーは不快な気分、自分が一つの物 (objet) にすぎないことに気づく (QUILLIOT, Roger: *op. cit.*, p. 100)》。
51. I, p. 1195.
52. I, p. 1198.
53. I, pp. 1198, 1199.